



京都大学 総合人間学部 広報

特集 外から見た総人・人環

外から見た総人・人環	三好 郁朗	2
遥かなる時の流れに	池田 浩士	4
3・11と科学・価値	林 哲介	6
総人・人環の未来への期待	小原 丈明	8

新任の先生方より

京都のくずきりからダブリンの豚足まで	小島 基洋	10
ことばの不思議との出会い	谷口 一美	11
新任のご挨拶	佐野 宏	12
数学から文学へ	塩塚秀一郎	13
フィールドワークのすすめ	風間 計博	14
土壌圏に生態学のフロンティアを求めて	東樹 宏和	15
より良い大気環境を次の世代に残すことを目指して	梶井 克純	16
新任のご挨拶	森成 隆夫	17
無機蛍光体が切り開く未来	上田 純平	18

特集 外から見た総人・人環

外から見た総人・人環

三好 郁朗 (京都嵯峨芸術大学学長)



「外から見た総人・人環」についての原稿依頼、気安く引き受けたのはよいが、いまになってためらいを覚えている。私は、教養部の時代から人間・環境学研究科の設置、

教養部解体、総合人間学部の出発へと、国立大学法人化直前の一大過渡期にお世話になったわけだし、退職後はまた違った環境に身を置いている経験からも、それなりに学部の現在について思うところがあり、その将来にける期待も大きい。ただ、辞めた者がいつまでも未練がましくてはと思ひ、この十年余、ほとんどキャンパスを訪ねていない。それでも「外から見た」と言われると、もはや身内に数えてもらえなくなったことをいまさらのように実感する。この間、ずいぶんと構内の様子も変わったようだし、先生方や事務の方々も面識のない方が多くなっている。なにしろ、かつて指導した元の学生さんが教員となって活躍されているのだし、私などが何をいまさらと思うのである。

それはそれとして、「外から見た総人」で一番に思うのは、遠慮抜きの言い方を許していただければ、「目立たぬこと」ではないだろうか。たとえば先生方の名前が新聞やテレビに出ても、京都大学大学院教授などとあって、総合人間学部とはめったに報道されない。文学研究科なら、断るまでも

なく文学部の存在が前提になるだろうが、人環と総人の関係では同様とゆくまい。キャンパスを訪ねれば、かつては第三高等学校時代の名残がいたるところに見られ、本部キャンパスとはまた違った歴史と文化の存在をつよく感じたものだが、それはもう昔の話、いまでは本部構内と何一つ変わるところがない。入試対策の本などを見ても、第二文学部、第二理学部扱いが払拭されたとは言ひ切れないように思う。

文系、理系、さまざまな分野の先生方を擁していることは、教養部時代から変わることなく、いまも学部にとっての財産であろう。しかしながら、学部にしる研究科にしる、講座名から専攻領域の内実を推し量ることは、かならずしも容易でない。一般的な学問分野の伝統や方法論と総人における教育システム、人環における研究システムが、どこでどのようにかかわっているのか、いないのか、第三者にはなかなか見えてこないだろう。研究室を訪ねるにしても、どこへ行けばどういふ分野の先生方が集まっておられるのか、学外者は困惑させられる。そういえば、構内の案内板、あれはぜひ一工夫いただきたいものである。

一体化されたはずの総人と人環の関係も、先生方の担当講座と学会など伝統的な専門領域とのかかわりも、部外者には把握がむづかしい。設立20年にして「総合人間学」はいまだ寄り合い所帯の印象をぬぐい切れないのである。何をもちて学部・大学院の統一性、整合性がはかられているのか、

そうしたことに一層の広報活動が必要と思える。もっとも、先般、人環の博士論文審査に加わる機会があったのだが、私などの領域概念を一步も二歩も乗り越える論文を読ませてもらった。すでに新たな研究領域が広がりつつあると、心強く感じた次第である。

専門教育の比重がこれまで以上に大学院へ移った昨今、学部の役割は狭い意味の専門教育である以上に、文字通り総合的な学識をそなえた人材の育成にあるはずだろう。「総合人間学」は、まさしくそうした新しい時代の学部教育の理念、目的を先取りしたものであった。ただ、それが外部からはなかなか見えにくい。かつては京都大学が輩出する人材のすべてが、大学人として社会人としての基礎を、教養部において学んだのであり、ある意味、教養部こそが京大人を育てるのだという、他学部とは異なる役割にひそかな自負をもっていたものだ。だからこそ、さまざまな分野の専門家が既成の学問領域を超えて雑居しながら、教育面での理念は明確に共有できていたのである。かつての教養部のそうした役割は、いまや全学共通の組織に委ねられたようで、総人はあくまで専門学部として独立した教育を行っておられる。したがって、そこには旧来の大学教育にない、新しい教育目的なり理念なりがあるわけで、それが、学内はもちろん、広く社会に認知されることこそ、学部の今後には不可避の課題となるだろう。

ホームページの簡にして要を得た記述をもってしても、あれだけでは足りない。総人ならではの教育カリキュラムを明確にするとともに、教授陣が他学部とは異なる理念をどのように共有しておられるのか、そういったことの広報にも、ぜひ努めていただきたいと思う。そういえば、ホームページに総人・人環の歴史についての記事がない。結果として、教養部の歴史も、第三高等学校とのかかわりも、「大学百年史」でもひも解かない

かぎり、やがて世間に忘れられるところとなるのではないか。

京都大学の歴史にとって三高との関係は看過できまい。三高が吉田キャンパスにあったということで、教養部が、ついで総合人間学部が、そのいわば後継者としての役割を自認してきたはずである。私などが「三高自昭会」なる組織の理事長を仰せつかっているのも、そのためであろう。もっとも、三高は吉田の前、本部キャンパスにあったのだし、その歴史を記念する組織は本部キャンパスに置かれる方が正しいのかもしれない。いま、大学文書館がその歴史的遺産を引き継ぎ、三高記念室として運営・公開する構想が動いている。結構なことだが、ここでもまたひとつ、かつての吉田キャンパスと教養部の歴史をたどるよすがが姿を消すのかもしれない。

いろいろ勝手を書きました。「外からの無責任」ということでご寛容願います。

(みよし いくお)

平成8年4月～平成10年3月 総合人間学部長
平成10年4月～平成11年7月 京都大学副学長
平成13年3月 京都大学退官(京都大学名誉教授)
平成13年4月より現職

遙かなる時の流れに

池田 浩士 (京都精華大学客員教授)



中学生のころ転居してから一度も訪れたことがなかった故郷の町に、三十数年ぶりで立ち寄る機会があった。すっかり小さくなったように感じられる家並みを振り返り

ながら歩いていくと、むこうから、仲がよかったA君のお父さんがやってくるのが見えた。なつかしさのあまり思わず駆け寄って、「おじさん、お久しぶりです。ほくヒロシです。お元気で何よりです。おまへ、あいかわらず人をからかって喜ぶ悪い癖が抜けないんだな」という返事がかえってきた。それはお父さんではなくA君その人だったのである。

これは、外界の変貌には敏感なつもりでいる人間でも自分自身の変化には無意識であり無感覚である、ということを物語る小話の定番の一つだ。年齢に限らず、およそ自分の変化に気づくのは難しい。それは、世界を見る視点、現実を考察し評価する座標軸が、ほかならぬ自分自身だからだろう。そしてもちろん、座標軸そのものの変移に無自覚なら、外界の姿を正確にとらえることはできない。それゆえ、座標軸が確固不動でありうるとしたら、それにはそれなりの意義がある。いかにもてはやされ、どれほど追従者が多くても、水面の泡やゴミ芥が所詮は移ろい流されていくアブクでありゴミ屑でしかないことを見定めるためには、座標軸である自分がその濁流に流されないだけの強固さを持っていなければならない。

だが、それにもまして大切で、しかも困難なの

は、塵芥や泡沫を救世主や永遠の価値のようにもてはやす世間の流れとは別の視点と座標軸を自分のなかに据えることだろう。言いかえれば、座標軸である自分自身の変化についての感覚と意識を育んでいくことによって、遙かな時の流れと共振するような自分なりの視点を模索することだろう。

京都大学の総合人間学部と大学院人間・環境学研究科が、創設もしくは変態からわずか二十年ほどで、ある程度の「社会的評価」を得て「ステータス」の向上を享受しているとすれば、それはさしあたり、ゴミや泡クズをもてはやし、それと一緒に流されていく「世間」や「世論」のたまものでしかない。自分の名称から「京都大学」というたった四文字を除去して、それでもなお同じ「評価」をゴミと泡の流れがわたしたちに与えてくれるのだろうか。それどころか、近ごろでは、その「京都大学」という名称にさえも「総長」をはじめとする大学管理者たち自身が、不安と心細さを感じはじめているらしく、やれ「カレー」だの、やれ「ビアレストラン」だの、やれ秩序だの序列だの受賞だのと、もっぱら濁流のなかでの反響と注目とを物欲しそうに待ち望んでいる姿は、原爆と原発の研究開発実用化に多大な貢献をなしたあの、かつての少年たちの夢のヒーロー湯川秀樹博士でさえ、眉をひそめているに違いない。

というのは、やはりかつて少年時代に日っ本で最初のノーベル賞！湯川博士にあこがれて原子物理学をこころざし、みごと核エネルギー研究開発のメッカ京都大学のしかも原子核研究の中核的研究者となりながら、専門研究者として反原子力の理論的姿勢を明確にしたがゆえに「総長」はもち

ろん「教授」という称号さえ与えられないまま定年退職した同年の友人のことを、このごろしきりに思うからである。この人の名前は本気で調べればすぐにわかるだろうから、ここではB氏としておく。B氏が「湯川少年」の長い夢から覚めたのは、1960年代末の大学闘争のなかで学生たちから研究者の責任について苛烈な追及を受けたときだった。その衝撃によって、B氏は「研究とは何か?」「研究者とは何か?」という何の役にも立たない問いと向き合いつづけることになった。政府や大学管理者から見れば「給料泥棒」「税金詐欺」に等しい所業である。なぜなら、3・11のあとでひたすら原発の安全を保証しつづけた（今でもなおしつづけている）御用学者たちのような研究者をこそ、国民の税金は飼育しなければならないからだ。これら御用学者や御用保安院とはまったく逆行する所業の一環として、あろうことかB氏は、このところずっと、原子エネルギーも電磁波も波長の違いこそあれやはり人間に（人間以外の生物、自然についてはいまは言わないとしても）害毒を与える、という研究結果を踏まえて、諸企業、諸大資本の憎悪を浴びながら、高圧送電線から電子レンジ、ケータイ電話、LED電球、等々に至るまでの電磁波の深刻な害毒について警鐘を鳴らしつづけている。それは、B氏が時代遅れで自分の老化に気づかないからではない。時流に乗って漂うままに大切なものを奪われ破壊されていく自分自身を、いわば悠久の時の流れを尺度にして冷徹に見つめているからだ。

というようなことをこれ以上いくら書いても、初めからわかろうとしないだけの偏差値的鍛錬を経てきてゆるぎない価値座標軸を内蔵する優秀な総人・人環の学生には馬耳東風だろうから、結論だけを言おう。こういう研究者やこれと同類の学生・職員がいない大学は、学部や研究科の名前がいくら立派で穏当で長くても、この世界を真に見るまなざしを持たない、ということだ。そういう

研究者や職員・学生がなかなか出てきにくいのは、今も昔も大学という施設の基本的特質の一つだったが、いよいよこれが絶望的となったのは、それでもある一時代には大学に存在するとされてほとんど疑われなかった「大学の自治」と「教育・研究の自由」が、とうの昔に死語となってしまったからである。「総長」や大学管理者たちに問われるのは経営手腕だけ、それ以外にはせいぜい管理能力という外的秩序維持の実行力だけで、研究や教育という分野の営みにとっていかに「異端」が不可欠か、「型破り」こそがパイオニアではないのか、ということなど考えてはならない。パイオニアの概念そのものが、濁流の流れに乗ってくるくと変わる政治権力のその時々短期方針と、それを束の間に実行に移して「出世」していくキャリア組の文部科学官僚によって定められる。その鼻であしらわれて「大学」はくるくると新機軸を打ち出さねばならない。

わたしには、愛国心というものはカケラもないので、このままでは日本は滅びる、などと心配する義理はカケラもない。しかし、もしも「愛国者」というものがまだ生息しているとしたら、なぜこのような「教育行政」のありかたに生命を賭して異を唱えないのだろうか。侵略戦争によってであれ天命によってであれ「国」が滅びに向かっているとき決まって登場する「愛国者」さえ、この国家社会にはもはやいないのだろう。わたしには、かつての生活の場の一つだった「大学」を愛する心などこれっぽちもないので、せめて一人でもそういう学生が総人・人環にいることを望むという資格などない。だが、そこが、目先の泡やゴミ屑に媚びへつらわず、遙かなる時の流れに共振しようような生きた座標軸を模索する場であってほしいという夢は、それでも共有したいのだ。

（いけだ ひろし）

2004年3月 京都大学退職（京都大学名誉教授）

2004年4月～2009年3月 京都精華大学教授

2009年4月より現職

3・11 と科学・価値

林 哲介 (京都工芸繊維大学副学長)



総人・人環の“外”者になってもう7年になります。その間、京大とはすっかり違う小規模大学の空気を吸ってきましたが、小さい大学ほど、大学に対する外部からの声

は大きく聞こえます。「外部からの声」といっても、耳につくのはもっぱら政・財界の“苛立ち”とこれを伝える文科省や教育審議会などの掛け声です。グローバル化に対応する競争力強化、イノベーション人材の養成、効率化・機能強化、国際通用性……といった論調は10数年来ほとんど変わっていませんが、こういう掛け声に大学がどう応じるか、予算の誘導配分や評価などを通じた仕掛けは年々強まり、国立大学をはじめ全国の大学が皆似たように唱和する状況は、相変わらず実に日本的だと感じます。

そんな中で、昨年の3月11日という日がありました。とりわけ原発崩壊には強烈な衝撃を受け、あれ以来晴れない気分は今も続いています。原発安全神話、エネルギー資源や環境のこと、そして政治・経済社会の病的極限状態、だれしも多かれ少なかれ問題に感じてきてはいたことですが、とりわけ自然科学に関わるものとして、教育に関わるものとして、何をしてきたのか、何に流されていたのか、何を失っていたのか、そんな想いを払拭し切れないうちです。

こんな気持ちとは裏腹に、文科省はまた春から「大学改革実行プラン」なるものを打ち上げまし

た。少子高齢化やグローバル化による経済競争の激化に対して「社会変革のエンジンとなる大学づくり」という掛け声ですが、その論調はこれまでの繰り返しでしかありません。大学に任せておいては何も変わらないという苛立ちが頂点に達しているかのようです。社会の要請としてとりわけ「人材養成」が強調されていますが、大卒人材に求めるものといえば「コミュニケーション力」「チャレンジ精神」「主体性、行動力、意欲……」と、お決まり文句が並びます。思想の欠落した人材像では学術文化に根ざした変革へのベクトルは感じられません。人材の“材”からは、材料、材木、資材、廃材などが浮かんでしまうばかりです。しばらく前に見た京都新聞の社説でも「多様な学問の自由な発展の場であるはずの大学を、国際競争力保持の手段と位置づけざるをえないところに、政府の“余裕のなさ”が見える……。経済成長や国力増進のための人材育成の目的では視野が狭すぎる。」と喝破していました。「多様な学問の自由な発展」という言葉が大学の外から聞かれると、大学人は少し安堵するのですが、これもまたいささか言い旧された御符のような感じがします。3・11を想うと、これだけではないもっと本質的な問題があるように思います。本当に何が求められているのかをはっきり主張できていないところに大学の頼りなさがあるようです。

昔から日本人は“家”、“ムラ”、“会社”、“空気”を大切にする習性があると言われていました。家族・血縁はもとより、身のまわりの生活世界での繋がり、利益、安全・安心を優先させ、そのた

めの献身を厭わないが、その代り、身のまわりの繋がりから一歩離れた外の世界の事象には逆に無関心で、時には排他的にもなる。かつて世界が驚愕した高度経済成長の支えとなった年功序列・終身雇用のシステムも、この日本人の習性に根ざしたものといっても間違いではないのでしょうか。この高度経済成長と大学の大衆化のおかげで、ひと昔のエリート教養主義は衰退しましたが、それに代わるものはまだ確立されていない。社会の病的極限状態を変えていく価値の支柱が確立できていないように思われます。

哲学科の先人野田又夫氏の言葉を借りると、「人間の思想の根本的な問題は、第一に、世界がいかにあるかという問いと、第二に世界のなかで我々はいかに生くべきかという問いである」と。つまりところ科学と価値の課題ということでしょうか。あらゆる事象に対して徹底して科学的立場を貫くこと、身のまわりの利益、安全・安心の前に、あらん限りの知を動員して科学的検討を施すこと。そしてもうひとつが、地上のあらゆる世界、立場の人々との共生を見据えること。こういう立場が人すべての日常生活のなかにしっかり浸透していないところに歴史的未成熟があるということですね。日々学問をしている大学からの発信が不足しているのではないかと感じるのです。

こんなことを考えたとき、総人・人環のミッションはこのことにあったような気がしました。総人・人環が果たしていること、果たそうとしていることをもっと顕わに発信していくことが必要なように感じています。もう10年以上前になりますが、総人のゼミナールで、古代ローマの詩人ルクレティウスの「物の本質について」を紹介し、これを子供向けに簡訳した『原子の歌－宇宙をつくるものアトム』（ルクレティウス著、国分一太郎訳編、国土社、1991年）を読んだ感想を求めたことがあります。ある学生のレポートにこのような

のがありました。

古代ギリシャにおいては、全ての学問は共通の、そして明確な動機を持っていた。それは「人間とは何か?」「この世界とは何か?」という知の欲求。こうした切実な問いに対する答えを見つけようと、人々は様々な角度から思考した。これこそ全ての学問の発端であり、根源的な欲求だった。

ルクレティウスの詩のあちこちに、そういう知の欲求、それにかかる情熱がうかがえる。現代の私たちよりも未知が多い分、その思いは強く切実だったのかもしれない。というよりむしろ、私たちがわずかな知識の上に安住してしまって、内から湧き上がるような知の欲求を忘れかけているのかもしれない……。

人はなにか未知なもの、困難なものに出会うと、そこから先を神の手に委ねて、自らの判断を放棄してしまうという選択をなしうる。その誘惑に甘んじることなく、社会の風潮に惑わされることなく、注意深い洞察、研究によって真理に近づいていく、その彼らの姿勢こそまさに“科学的”と呼ぶことができるのかもしれない。

と、これを書いてくれた卒業生は今も、総人の心意気を戴して活躍しているだろうと想像しています。

(はやし てつすけ)

平成10年4月～平成13年3月 総合人間学部長
平成15年4月～平成17年9月 高等教育研究開発推進機構副機構長
平成17年10月～平成18年3月 京都大学副学長
平成18年3月 京都大学退職（京都大学名誉教授）
平成18年4月～平成22年3月 星城大学長
平成22年4月より現職

総人・人環の未来への期待

小原 丈明 (法政大学文学部専任講師)



いまから5年前、京都大学に在職していた折、筆者は「心の中の京都大学」というテーマで小文を書いた(『紅萌』第12号参照)。学部生の頃からずっと京大に在籍し続けていたこともあり、その

時は内側からの視点のみで京大について、とりわけ吉田南構内や総人・人環について記したと記憶している。

そして、このたび、「外から見た総人・人環」とのテーマで本稿を書くこととなった。5年前とは逆に外からの視点で総人・人環について記さなければならないが、京大を離れてわずか2年半の時点で、何を記せばよいか困惑している。とはいえ、執筆を引き受けてしまったからには何かを絞り出さなければならない。そこで、この2年半で感じた、京大の内側には気付かないであろう事柄について、自戒を込めて率直に記してみる。

京大、総人・人環の知名度

関東で生活するようになり、新聞やテレビ等のマスメディアを通じて「京都大学」の名称を目にする機会が減った。関西から離れているので当然であるが、それにしても、以前との差異には愕然とさせられる。関東に起因する情報に偏るのは仕方がないとはいえ、あまりにも京大の情報が少ない。あくまでマスメディアを通じての印象にすぎないが、京大は全国スケールでの情報を発信しきれていないように感じられる。

まして、京大の中でも「総合人間学部」や「人間・環境学研究所」に関する情報を目にする機会は稀である。そもそも、総人や人環が認知されて

いるのかも疑わしい。関東でもほとんどの人が京大のことを知っていると思われるが、京大の中に総人や人環という組織があることを認識している人はごく少数だといえよう。

名称の持つ意味

筆者の勤務先には人環と似た名称の「人間環境学部」という組織がある。また、類似した名称の学部や大学院、学科、専攻を有する大学も全国に散見される。同様に、総人と類似した組織を持つ他大学も多い。

このような名称を有する新たな学部・大学院が設立されてきたのは、1990年代前半の文教行政の転換を受けての動向(大学設置基準の大綱化に伴う教養部改革・廃止、および大学院重点化)とともに、環境問題など多くの社会問題について、大学においてその対処方法の探究が要請されていたことが背景にある。それゆえ、その結果として1990年代前半から2000年代前半にかけて設立された組織に共通するのは、上記の現代社会の要請に対応するという設立目的であり、オルタナティブな学際的組織体系であった。総人や人環はその先駆的事例であることから、当然これら共通事項に合致する。しかしそれだけでなく、後発の組織とは異なるオリジナリティも有する。たとえば、人間・環境学研究所の「・」には、単に環境学を志向する組織に留まるのではなく、学問において人間と環境との相互関係性について文系・理系を問わず取り組むことで新たなパラダイムを構築するとともに、社会において人環が人間と環境を繋ぐ組織であろうとする願いが込められているのである(詳細は『地域と環境』第10号を参照)。

学際系学部・研究科の意義と課題

では、一般に、学際系学部・研究科には何が求められているのであろうか。そして、その長所や短所はどこであろうか。まず指摘できるのは、やはり既存学部との差別化であろう。従来の枠組みにとらわれない組織の下で、これまでとは異なる観点・方法論によって、研究・教育面だけでなく社会に対する貢献が期待されている。まさにこの点がこれら組織の長所と成りえよう。既存の学問分野を横断するネットワークを構築することが、同一組織内で可能であることは大きな利点といえよう。

しかし、現状はどうであろうか。総人・人環に在籍していた筆者の経験では、その利点が十分には活かされていない印象を受ける。もちろん、人環フォーラムなどの行事を通じて交流が図られているし、また、研究会や勉強会など個々のレベルでも分野の垣根を越える繋がりがあるのも事実であるが、総人や人環という組織の特色といえるほどの動きにはなっていない。したがって、広範な学問分野が有機的に繋がらない小組織の集合体にすぎず、かえって組織としてのプレゼンスを弱めているように感じられる。つまり、学際的な組織の短所は長所と表裏一体であるのだが、ここでは短所として表れてしまっていると指摘できる。

また、組織としての歴史が浅い点も短所と指摘できよう。そのため、既存学部に比べて社会的な認知度も低く、組織としての成熟度も低い。上述の短所にも由来するが、その結果、組織としての一体感や帰属意識が希薄となっている。

同窓会ネットワークの必要性

このような短所を克服し、長所を活かすためには、やはりしっかりとしたネットワークを構築することが重要であることは言うまでもない。その中心的な役割を果たすべきなのが同窓会組織（京都大学 総合人間学部 人間・環境学研究科 同窓会）であろうが、残念ながら、その活動に関わったことがある人は少ないのが現状である。

在学期間中に学問分野を越えたネットワークを

構築するのも必要であるが、卒業および修了後にそのネットワークを活かすことの方がより重要であると考えられる。実社会においてこそ多分野にわたる学際的な組織のネットワークの威力が発揮できるであろうし、また、知名度という意味だけでなく、社会的な役割や貢献において総人・人環のプレゼンスを高めることができる。そして、帰属意識や愛着も生まれる。そのためにも、同窓会組織の充実が望まれる。

人材の多様性

総人在学中に友人たちと交わした会話が思い出される。各々が色々な専門分野で学び、そして様々な業種の職に就くのであれば、将来、各々の経験を活かして多方面に通じるコンサルタント業が起業できるのではないかと。もちろん、具体的なプランを有する話ではなかったが、それぞれの友人たちが多方面で活躍している現状を鑑みると、あの会話はあながち実現不可能ではないのではと思えてくる。それほどまでに、総人や人環は多様な人材を生み出してきているといえよう。

最後に、5年前の小文の話に戻る。その小文の結びとして、京大では個性豊かな人材が少なくなってきたと記した。その文章の「個性豊かな」というのには、型にとらわれないという含意があるのだが、そういう人材は5年経った現在でもやはり減少の一途だと思われる。しかし、総人・人環出身者には、多様という意味での「豊かな」人材がいるであろうし、これからも輩出されていくであろう。現時点では、そのような人材の存在はあまり顕在化していないが、今後、学問・研究の世界において、そして実社会において、総人・人環出身者の活躍が、京大・関西の外から見ても目立つようになることを切に願う。

（こはら たけあき）

平成10年総合人間学部卒業後、平成18年博士（人間・環境学）学位取得、人間・環境学研究科研修員、同助教を経て平成22年4月より現職

新任教員より

京都のくずきりからダブリンの豚足まで

小島 基洋 (人間科学系)



2012年4月1日付けで、総合人間学部・人間科学系・思想文化論講座に着任いたしました。前期の授業も無事に終え、心穏やかに進々堂の木陰でアイス珈琲を堪能しております。河原町・丸善

がスーパージャンボ・カラオケ広場になり、あやとりがサブウェイになった2012年の京都は、それでも十分に魅力的な街であり続けています。いづ重の稲荷寿司も、銀閣寺の私設図書館も、いづもやのコロッケも、出町ふたばの豆餅も、鍵善良房の・・・(これくらいでやめておきます) 忘れるわけにはいきません。

そんな洛中街歩きの中にも、頭の片隅では、アイルランドの首都・ダブリン市街の様子が気になっています。ある本に出会って以来、この性癖は変わることがありません。以前の勤務校のそばにあった札幌・西岡のカフェ NOEL にいても、豊橋・向山のネアポリスにいても、気づけば心は異国の街角を漂っていました。

私の専門はアイルランドのモダニズム作家ジェイムズ・ジョイスです。23歳で故郷ダブリンを去って以来、トリエステ、チューリッヒ、パリと居を移しながら作品を発表した亡命作家です。彼が描き続けたのが、生まれ育った街、ダブリンに生きる人々の姿でした。代表作『ユリシーズ』には、1904年6月16日(水)の朝から翌17日(木)の明け方にかけての市内の様子が事細かに記述されています。この日、主人公の中年男レオポルド・ブルームは、広告取りの仕事に出かけ、国立図書館に立ち寄り、妻の浮気を気かけながらホテルで夕食を済まし、夜の街に向かいます。そこで彼は一軒の肉屋に目をとめることになります。

彼は閉まりかけているロール・シャッターをくぐって、オルハウセン豚肉店の中に消える。しばらくすると、シャッターの下から姿を現した。・・・左右の手には包みを持っている。片方には生温かい豚の脚肉が、もう片方には胡椒がかかった冷たい羊の脚肉が入っている。(『ユリシーズ』15挿話より)

主人公ブルームが夜食用の肉を購入してから1世紀が経過した2004年、ダブリンに留学する機会に恵まれた私は、ジョイス愛読者の友人と共に夜の街に足を踏み入れました。

しかし、100年の年月はあまりに長過ぎました。そこにあったのは、廃墟となった娼館と建てられたばかりと思いき近代的なオフィス。そして、オルハウセン豚肉店があるはずの場所、タルボット通り72番地には、チェーンの珈琲店インソムニアが店を構えていました。

あの日、オルハウセン豚肉店でブルームが購入した豚肉はどんな味だったのか、今となっては永遠の謎です。あまりに個人的で、あまりに些末な問題かもしれませんが、私にはそれがどうしても気にかかります。個人的で些末な問題を通してこそ、世界の核心に触れることができるような気もするので(タルボット通りの生温かい豚足でも、四条



ダブリンを流れるリフィー川
(ジェイムズ・ジョイス橋にて撮影)

通の冷たいくずきりでも)。そんな夢と共に、今日も京都の街で『ユリシーズ』を読み続けています。

(こじま もとひろ)

ことばの不思議との出会い

谷口 一美 (認知情報学系)



2012年4月1日付けで、総合人間学部認知情報学系 言語科学関係に着任いたしました。主に言語学と1・2回生対象の英語の授業を担当しています。新たな環境で慌ただ

しく毎日が過ぎ、気付けば前期が終わってしまいましたが、皆様のサポートのおかげで、自由な空気を楽しむ余裕も生まれているように思います。

私が学生だった頃、総合人間学部ができる前のことですが、本学を初めて訪れた時の思い出として真っ先に浮かぶのは、吉田南キャンパスの教養部棟に描かれていた巨大なキリンの壁画です。私にとって時計台に匹敵する京大のシンボルといっても過言ではありません。キリンを見上げて圧倒されたあの時、ゆくゆくはこの場所に勤務するとはもちろん想像していませんでしたし、将来「言語学」に携わることさえ頭にはありませんでした。そんな私がなぜ言語学を専門とするに至ったのか、自己紹介代わりに述べてみたいと思います。

私は以前から教員志望でしたが、教科は数学か英語か、随分迷いました。文系か理系かを決定するにも、その回答期限が来ても心を決められず、先生に待ってもらったものでした。結局は文系を選択したのですが、それは考え抜いた末、やはり「ことば」が好きだと悟ったからです。そして実際に、中・高校の英語の授業で感じた不思議が、知的好奇心の芽生えになっていたのです。

例えば中学校で“John looks happy.”という文を学習した時、主語の John は実際には「見られる」側で、「見ている」のは話し手なのに、どう

してこんなふうと言えるのだろうかと思いましたが、高校時代には、感情を意味する動詞が英語では surprise, please など他動詞ばかりで、「驚く」「喜ぶ」のように自動詞中心である日本語とは対照的なのが気になりました。英語話者にとって感情とは自発的に生じるものではなく、常に何らかの原因に引き起こされていると捉えられているのだろうか、感情そのものは私達と同じだろうに……。そう思いながら受験勉強そっちのけで(逃避?)感情を意味する英語の動詞の自・他を調べたものでした。

そのようなわけで、大学では英語を専攻することになりましたが、中高時代に感じたこれらの不思議に答えを与えてくれることになったのが、大学で出会った「認知言語学」という言語理論でした。もちろん簡単に答えを出させてくれたわけはありませんし、実際にこれらの不思議は今なお私の研究テーマであり、分析を深めるにつれ一層「ことばのおもしろさ」を示してくれています。

総人の学生さんからは「入学前にやりたいことを決められなかった」という声を聞きます。私も経験上よく理解できますし、自分の学生時代にも総人があってほしかったと思うほどです。中高では知り得なかった学問の世界が大学には広がっています。入学前後でやりたいことが変わるのもっともなことです。幅広い選択肢の中で悩むこともあるかも知れませんが、内なる声に静かに耳を傾ければ、自身の興味関心に共鳴するものにきっと出会えると思います。私の専門である「認知言語学」が、その選択肢のひとつになれば幸いです。

(たにぐち かずみ)

新任のご挨拶

佐野 宏 (国際文明学系)



私は、2012年1月1日付で、総合人間学部 国際文明学系 歴史文化社会論関係（人間・環境学研究科 共生文明学専攻 東アジア文化論講座）に准教授として着任しました

佐野宏といます。

私は、8世紀を中心とする奈良時代の日本語を研究しています。具体的には『古事記』『日本書紀』『萬葉集』などを対象とした日本語史研究が専門です。ここ数年は「和歌の表記」を研究しています。「表記」といってもすぐにはイメージしにくいかもしれません。たとえば、萬葉集巻12の「寄物陳思」に、

垂乳根之 母我養蚕乃 眉隠 馬聲蜂音石花
蜘蛛荒鹿 異母二不相而（巻12・2991）

とあります。漢字ばかりで原文には空格もありません。これは現在「たらちねの母が飼ふ蚕の繭隠りいぶせくもあるか妹に逢はずして」と解釈しています。歌意は「母親が飼っている蚕、繭の中で隠っている蚕のように、ああ息が詰まる。彼女に逢えずに。」というほどの意です。「馬聲蜂音石花蜘蛛荒鹿」は暗号のようですが、「馬聲」は馬の鳴き声で「イ」（「ヒヒン」ではなくて「イイン」と聞いたのです）、「蜂音」は蜂の羽音で「ブ」、「石花」はカメノテという食用の甲殻類で古代語では「セ」、「蜘蛛」は昆虫の「クモ」、「荒」「鹿」はそれぞれ「アル」「カ」と訓みます。これらはみな現代語風に「あてじくろくがな」といって「万葉仮名」の一つです。ここには書き手

の戯れが感じられますから、とくに表記様式として「戯書」といいます。『古今和歌集』仮名序の「なづらへ歌」の注にこの類歌が引かれています。恐らくは萬葉当時にもよく流布していた歌の一つと思われます。ずいぶん難しく書いていますけれども、よく知っている歌詞だからこそ可能な戯書といえます。

そもそも自分たちの言葉をどのように文字で書くかということは、書かれた結果としての「表記」をどのように読むかということと並行しています。読むことは書くことを可能的に含みますし、その逆もまたしかりです。しかし、古代日本人が固有の文字を持たなかったことを思い出すと、話し言葉しかない環境から書き言葉が生まれるためには、「読む」ことをどのように自覚したかが問題です。書かれた表記を読むには文体や表記の様式についての知識が必要です。左の例でいえば、和歌の57577という定型や、結句の「イモニアハズシテ」が字余り句になってもよいなどは、和歌の文体様式に関わる知識ですし、その上で「馬聲」を「イ」と読むといったことは語の表記様式に関わる知識かと思えます。何とでも読めるから何とでも書けるとはいえ、それでは書記言語として伝達が十分にできませんから、やはり規則や制限が必要です。そこに文体や表記の様式があります。もとより漢語文がありますから全くの渾沌ではないにせよ、そこから何かしらの規則が生まれてくるところ、『古事記』の「天地初發」ではありませんが、私たちの文字と表記が生まれてくるところを考えています。

どうぞよろしく御願ひ致します。

（さの ひろし）

数学から文学へ

塩塚 秀一郎 (文化環境学系)



「フランス語に興味をもったきっかけは何ですか」フランスでも日本でもこういう質問を受けることがあります。残念ながら格好いい、劇的出会いがあったわけではありません。

高校生の頃は数学者に憧れていて、数学にはフランス語が必須だろうと勝手に思い込んでいました。問題を解くことは好きでも得意でもなかったのに、どうして数学に夢中になっていたかといえば、緻密にロジックを積み上げていった果てに、突然狂気というかファンタジーというか、とにかく摩訶不思議な世界が出現するのがたまたま魅力的だったのです。

とはいえ数学者になれるだけの才能があるはずもなく、大学入学と前後して関心はおのずと文系の学問に移り、結局フランス文学を専攻することになりました。数学から文学へ、という一見極端な進路変更ですが、数学がもつ「論理」ではなく「ファンタジー」に惹かれていた私としては、二つの領域がそれほどかけ離れているとも思わないのです。現在では数理的な風味もあるフランスの実験文学集団に関心対象のひとつにしており、ごく自然に興味の円環が繋がったような気がします。

数学では正解が一つに決まるが文系分野ではそうではないとよく言われます。数学においても、新しい考え方や対象を創造していく最先端の研究では、事情が異なるはずですが、曖昧さを許さないというイメージは揺るぎません。一方、普段の私の営みでは、フランス語の文章の一文、一語すら、

意味を決めかねることはよくあります。意味、解釈すら一通りに定まらないのなら、その翻訳はなおさら一通りに決まるはずがありません。言うまでもなく、翻訳においては、原文のもつさまざまな特質のうちの何を優先するかによって、「正解」の形は変わってきます。

ところが、数年前に完成させた翻訳では奇妙な感覚を味わいました。その翻訳は、Eの文字をまったく含まないフランス語の原文を「い段」抜きの日本語に変換するという、嗜虐的とも言える試みでしたが、あまりに縛りがきついせいか、構文も訳語も、まるで方程式を解くように一意的に定まっていくな気がしたのです。もっともこれは多分に錯覚であり、「い段」抜きの日本語に訳すというルール自体が他のルールと可換かもしれませんから、自分の翻訳が唯一の正解だと言うつもりは毛頭ありませんが。いずれにしても、かつて明晰な論理にあれほど浸っていた自分が、翻訳などという曖昧で果てしない作業に絡め取られているわけですから、つくづく人生の成り行きは分からないものです。

さて、肝心なことを一言。こんなふうな私の進路を曲げたのは、専門科目を担当されていた先生方ではなく、理系の学生相手にも手を抜かず、その道の果てにあるエロスやら狂気やらを小出しに紹介しつつ、熱心に愉快地誘惑してくださった教養担当の先生方でした。一人の数学少年の人生を狂わすことだってあるわけですから、心して教養科目に取り組まねばならないと思っています。

(しおつか しゅういちろう)

フィールドワークのすすめ

風間 計博 (文化環境学系)



この4月、文化・地域環境論関係に着任し、文化人類学関連の科目を担当することになった。今日の文化人類学(社会人類学)における研究主題は多岐にわたり、さまざまな視点をもつ研究者がいる。しかし、文化人類学者を自認する限りにおいて、自身の得意不得意の別はともかく、一次資料の収集方法として、フィールドワークを否定することは誰もできないはずだ。そしてこの分野のフィールドワークの基本とは、調査項目の一方的な聞き取りではなく、ある具体的な場所で日常生活を営む人々に寄り添い、丹念に対話を継続する地味な作業である。

文化人類学の学部教育において、もちろん学説史や著名な理論の理解は不可欠である。きわめて広範な対象領域を含む分野のため、まじめに取り組もうとする者は、偏狭な視野のうちに留まることなく多様な興味を持ち、幅広い知識を貪欲に吸収することが望ましい。加えて、やはりフィールドワークの経験を抜きにして、文化人類学という学問の理解は成り立たないのである。

これまでの教育経験に基づけば、授業であれ卒業研究であれ、フィールドワークに関わる実践は、学部学生にとっても教員にとってもきわめて刺激的でおもしろいものである。教員の立場からすれば、自らが調査を行うわけではなく、学生を見知らぬ人々の生活の場に派遣する。もちろん、学生個々人の興味と意思を尊重し、教員と相談の上で自ら調査対象や場所を決めてもらう。教員は、学生の新鮮な体験や持ち帰った情報を可能な範囲で教えてもらう。そして、共有した一次情報についていかに分析し、どのような方向で考えを深化させることが可能か、次の調査では何を行うか、ゼミの参加者全員で発見法的に議論していく。

教員は、未知の世界の一端を垣間見させてもらうことができる。想像力を刺激される、興味深い

疑似体験の世界である。ただし、教員だけが一方的に何かを得るわけではない。当然ながら教員は、長年にわたる調査経験から、学生に役立つような助言を与える。そして何より、フィールドワーク自体が、就職希望者であれ、将来的に学問を志す者であれ、学生にとって得難い経験を提供することになる。フィールドワークは、これまで受験勉強に専念し、さほど世間の荒波に晒されず、社会的経験を積んでこなかった若者を、実社会の見知らぬどこかに解き放つ機会となる。

私たちの身近な場所で調査するときさえ、世代が離れているなら当然、たとえ同年代の者であっても、人生経験の異なる人々がいる。少し離れた場所へ行けば、全く異なる自然環境や、社会・文化的背景のもとで育った人々がいる。そうした生身の人間たちの日常的な感覚や価値観を、可能な限り膚で感じ取り、その理解を試みるのである。

しかし実は、言うほど簡単なものではない。学生たちはときに不快な経験をし、理不尽にも見える壁にぶつかる可能性がある。フィールドワークの経験は、大学構内で文献を読み、静かに思考して時を過ごすだけでは、決して得られない類いのものである。挫折し、止めてしまう者が出てくるかも知れない。だからこそ、やり遂げたときの達成感は計り知れないものとなる。

授業や卒業研究程度の調査経験と侮ることなかれ。感受性の強い20歳前後の若者が、初めて価値観の全く異なる他者に遭遇し、その世界の内に踏み込むのである。調査経験は大きな衝撃を与え、学生にとって忘れ得ぬ特異な記憶を形成するだろう。教員は、調査を通して、学生の感受性の肌理を受け止め、ともに試行錯誤しながら、資料整理や考察、文章化の作業過程を見守る。私は京都に居を移して間もないが、今後しばらくの間展開することになるだろう、新たな面々との対話を通じた疑似的世界の体験を密かに楽しみにしている。

(かざま かずひろ)

土壌圏に生態学のフロンティアを求めて

東樹 宏和 (自然科学系)



「地球の皮膚」とも表現される土壌は、食糧生産を支え、飲み水をもたらすとともに、植物の光合成を通じて膨大な量の温室効果ガスを溜め込む貯蔵庫として働いています。

古来、文明の寿命は土壌の寿命に大きく左右されてきました。モアイ像で知られるイースター島では、高い人口密度が過度の耕作による土壌流失を招き、食糧生産を行えない環境を作り出したと言われています。世界各地の歴史の中で繰り返されて来たこうした失敗は、現在、地球規模で進行しつつあります。世界人口が70億人を越えるなか、土壌とうまくつきあうための科学的知見が求められています。

私は大学院から博士研究員時代を通じて、生態系において昆虫や植物、細菌がどのように関わっているかを研究してきました。2年前に「白眉プロジェクト」の特定助教として京都大学に赴任してからは、生態系の動態に関する基礎的知見と生態系管理の応用技術を結びつけたいと考え、土壌圏内の複雑な生物間相互作用を研究対象としています。

前述の土壌圏は、生態学における巨大な「ブラックボックス」と言えます。一握りの土の中でさえ、細菌や真菌（キノコやカビのなかま）、線虫、節足動物の無数の種がひしめいています。微生物が主役の地下の世界は、多くの生物を肉眼で観察できる地上の世界と多くの面で異なっています。計り知れない多様性と直接観察の難しさにより、地下

で繰り広げられる生物たちの相互作用は、その全体像を解明しようという試みを阻み続けて来ました。

一方で、生物多様性の喪失や地球温暖化が深刻さを増すなか、地下生態系はますますその重要性を認知されるようになってきました。自然生態系においても農地においても、ほとんどの植物種が「菌根菌」と呼ばれるキノコやカビの仲間と共生し、水や土壌中の養分を獲得しています。この菌根菌は植物の成長を促進し、土壌中の寄生性の微生物から植物を守る働きをする一方、植物側から糖のかたちで報酬を得ています。この共生を通じて、植物が光合成で固定する炭素の2割にあたる量が菌根菌へと流れていると言われており、地球規模の炭素循環を考える上でも、植物と菌根菌の相互作用を軸とした地下生態系の理解が重要性を増して来ています。

私は現在、次世代シーケンシング（大規模DNA配列決定）とネットワーク理論を融合させる分野融合プロジェクトを通じて、地下生態系の生物間相互作用ネットワークを解明する手法を開発しています。この手法によって、数百・数千種の生物が土壌の中でどのように関わっているのか解析できるようになると期待され、土壌の生物の働きを利用した自然生態系や農地の管理へと応用する道を模索しています。様々な生態系での野外調査とゲノム科学の大規模情報は、予想もしなかった生態系の側面を垣間見せてくれることがあります。こうした分野融合研究の興奮を学生のみならずと共有していきたいと思います。

(とうじゅ ひろかず)

より良い大気環境を次の世代に残すことを目指して

梶井 克純 (自然科学系)



2012年4月1日付けで、総合人間各部自然科学系(化学・物質科学)専門分野(人間・環境学研究科 関連環境学専攻 地球環境動態論分野)に教授として首都大学東京から転任して参りました。

私は元来レーザー分光学が専門で分子の電子励起状態や反応性を研究するいわゆる分子化学を研究しておりましたが、学位取得後5年ほどしてから大気化学へと転身いたしました。爾来一貫して大気環境の研究を進めております。

主な研究対象は光化学オキシダントです。これは対流圏のオゾン(O₃)およびアルデヒドやその他の光化学生成物の総称ですが、近年我国の都市部において増加傾向にあります。これらの原因物質は燃料などの燃焼により発生する窒素酸化物(NO_x)と揮発性有機化合物(VOC)が前駆物質となり大気中で化学変化を起こしO₃が生成してることが知られております。大気中のO₃を削減するためにはこれらの前駆物質を削減すれば良い訳ですが、事情は簡単ではありません。実際に公害問題として大きく認識し始めたのは1970年代初頭のことでした。この頃は前駆物質を削減することで大きなO₃の削減が認められ、一時オキシダント問題は解決していたとさえ言われていました。

しかし、近年明確なオキシダントの増加が認められるようになり、その原因の探求と削減が求められております。これは我国を含む先進国の諸都市域で起きている共通の環境問題です。新興国や

後進国のメガシティでは我々が1970年代に経験した状態にあり、前駆物質の削減で大きな大気質の改善が見込まれる状態にありますが、我々のおかれている状況はそれらとは明確に異なります。大気汚染問題が新たなフェーズへとシフトした状態にあると言えます。

これらの問題を解決するために、レーザー分光法等を駆使した大気分析装置の開発、化学モデル、大気観測等を通して研究を進めています。少しでもより良い大気を次の世代に伝えるために研究に励んで行きたいと考えております。

(かじい よしずみ)

新任のご挨拶

森成 隆夫 (自然科学系)



2012年4月1日付けで、総合人間学部 自然科学系 (物理科学) (人間・環境学研究科 相関環境学専攻 物質相関論) に准教授として着任しました。専門は物性物理の理論で、超伝導などを研究しています。こちらに来る前は、基礎物理学研究所にて研究に勤しんでいました。仕事の環境がだいぶ変わりましたが、講義等を通じて学生の皆さんと交流できるいまの状況を楽しんでいます。

私が手がけている研究テーマのひとつは高温超伝導の発現機構の解明です。超伝導を示す化合物はたくさんありますが、発現機構がよく知られている系と、発現機構が未解明の系があります。既に発現機構が確立している系といっても、最初の超伝導の発見 (1911年) からその理論的解決 (1957年) まで約50年を要しています。アインシュタインやファインマンといった錚々たる面々が挑戦しても解決に至らなかったのです。未解明の系のなかでも、高温超伝導は最大の難問となっています。高温超伝導を初めて発見した実験の研究者は既にノーベル賞を受賞していますが、発見から25年以上経過してもまだその理論は確立していません。寝ても覚めても核と成る部分を考え続け、ここ数年でようやく本質をつかみかけている感じですが、世界を納得させるまでにはまだまだ時間がかかりそうです。電子は小さな磁石になっていて、そのスピントよばれる小さな磁石の自由度が様々な面白い現象を引き起こします。私の理論は電子がその周囲にある電子のスピンのハリネズミのよ

うなパターンを形成するというアイデアに基づいています。この描像を確立するべく、微視的理論と現象論的理論の二つの側面からアプローチする一方、実験的に検証する方法を検討しています。

難問に挑んでいるばかりではなかなか論文が書けませんので、いくつか他のテーマも手がけています。通常、固体中を動き回る電子は、速度が光速にくらべて遅いため、アインシュタインの相対性理論は必要ありません。ところが、速度が十分遅いにも関わらず、相対性理論が不可欠と成る場合があります。ある有機化合物でこのような状況が実現していますが、磁場下での電気抵抗の振る舞いなどが相対論的効果を取り入れた理論で説明できます。

物性物理の面白さは、電子や原子核など個々の粒子の性質は良くわかっているにもかかわらず、それらが莫大なアボガドロ数のオーダーで集まり、結晶を形成することで、予想しなかった現象が顔を出す事です。コイルに磁石を近づけたり遠ざけたりすると電位差が生じるファラデー効果という現象が良く知られています。このファラデー効果では磁石を動かさなければ、電位差は生じません。しかし、磁石を動かさなくても電位差が生じる系があります。理論的予言を受け、数年前に実験的に確認されました。一見、マックスウェル方程式と矛盾するようには見えますが、物質中のスピンの配置とその磁場への応答を考慮する事で理解できます。こうした物性物理の研究の面白さを少しでもみなさんと共有できればと思っています。それと同時に、異なる分野の研究にふれることで、研究対象をどんどんひろげていければと考えています。どうぞよろしく願いいたします。

(もりなり たかお)

無機蛍光体が切り開く未来

上田 純平 (自然科学系)



2012年4月1日付けで、総合人間学部 自然科学系（人間・環境学研究科 関連環境学専攻 物質関連論講座）の助教として着任しました。私は、人間・環境学研究科の出身で、入学して以来5年ずっとこの吉田南キャンパスで研究生生活を行っています。慣れ親しんだ人間・環境学研究科への着任ですので、新しい環境に対する期待感や不安感というものはあまり感じられなかったのですが、その分早くこの助教の仕事にも慣れ、未熟ながら教育という新しい仕事に幸せを感じております。

さて、私の専門分野は、無機化学で、主に無機蛍光体を研究対象としています。無機蛍光体とは、ある特定の波長の光を照射した時に、異なる波長域の光に変換し発光する無機材料のことで、簡単に言うと光るガラスや宝石のことを指します。これらの発光材料は馴染みがないように思われますが、私たちが生活する上で、なくてはならないものです。例えば、省エネルギー・低環境負荷で注目されており、液晶テレビのバックライトや室内照明用として使用されている白色LED（Light Emitting Diode）、蛍光灯、光通信インターネット、標識（夜間塗料）、レーザ材料、最近では見かけることが少なくなりましたがブラウン管のテレビなど、様々なところに使用されています。

特に、私が研究しているのは、白色LED用の蛍光体や夜間塗料に使用される長残光蛍光体、そして高効率太陽光発電のための波長変換材料です。この太陽光発電のための波長変換材料は、太陽電池の上に設置し、太陽電池が変換できない、もしくは、変換効率が悪い波長の太陽光を変換効率の高い波長領域の光に変換して太陽電池に渡すことで、太陽光発電の高効率化を目指すものです。この波長変換材料に、高エネルギー光子1つを低エネルギー光子2つに切断（変換）する量子切断現象を組み合わせることで、理論的には、一般的に普及している結晶Si太陽電池の光・電気変換効率を約28%から約40%に向上することができると見積もられています。私は、報告されている量子切断蛍光体が持つ、「吸収波長領域が狭く太陽光を効率的に吸収できない」という問題点を克服する新しい材料を発見し、その物性評価を行ってきました。まだ変換効率が低く、波長変換材料による太陽光発電の高効率化は、実用化には至っていませんが、今後、更なる変換効率の向上により、量子切断を利用した波長変換材料が世界中のシリコン太陽電池のカバー材として用いられることを夢見て、日々研究に打ち込んでいます。

皆さんも、興味・好奇心をかきたてられる学問が、多種多様な分野を有する総合人間学部にきっとあると思うので、積極的に講義を受けたり、研究室を訪ねたりして自分の興味を是非探して下さい。

(うえだ じゅんぺい)

I	uman	S	編集後記 ◆『総合人間学部広報』第50号をお届けいたします。今号は「外から見た総人・人環」をテーマに、諸先生方からご寄稿いただきました。学際的な総人・人環ならではの研究・教育理念に自覚的であること、また、時代に流されないゆるぎない座標軸を堅持し続けることの重要性をご指摘いただきました。辛口の文章には、総人・人環への愛情と期待が溢れています。新しくご着任された9名の先生方のご挨拶からは、総人・人環の幅広く奥深い魅力を知っていただくことができます。「総人・人環ってどんなところ？」に答える一冊です。どうぞご一読ください。 (N・S)
ntegrated	H	tudies	

人間・環境学研究科
総合人間学部

広報委員会